

## 『チェルノブイリの祈り』

2015年11月09日

ノーベル文学賞を受賞した女性ジャーナリストのスペトラーナ・アレクシエービッチ（松本妙子訳）の『チェルノブイリの祈り 未来への物語』を恐れと感銘をもって読んだ。1986年4月26日、チェルノブイリ原発で史上最大のメルトダウン事故が起こった。

アレクシエービッチはチェルノブイリ事故に関わった多くの人々にインタビューをし、事故とその後について、多様な証言を聞き取り編集している。彼女自身の言葉は全くない。証言者の言葉のみをまとめ、悲しみと衝撃を伝えている。これだけの証言を聞き取る彼女の心の奥深さと愛に感嘆する。家族を愛し、友人に心を寄せる被曝者たちの人間であることの叫びが真っ直ぐに伝わってくる。「真実をとらえること、これこそ私がやりたかったことなんです」と語っているそうだが、チェルノブイリの実態を報告している。

チェルノブイリ近隣のロシア、ベラルーシ、ウクライナに住む人々は自然と向き合い、大地の恵みを喜び、素朴な信仰に生きている。原発事故の実態を理解しておらず、事故後の対応はあまりに無警戒であった。ロシア政府も正確な情報を伝えず、被害は甚大になっていった。大きな被害を知ってから、住民たちの不安と恐怖は膨れ上がっている。

消防士として働いた夫の傍で妻は「忘れないでください。あなたの前にいるのはご主人でも愛する人でもありません。高濃度に汚染された放射性物体なんですよ」と忠告された。彼女は一晩中「愛しているわ」と言いながら、夫の手を放さなかった。事故処理に当たって高濃度の放射能に晒された人々は体が破壊されながら亡くなっていった。母が病院から帰ってきて、娘の苦しみにこらえきれず「あんなに苦しむのなら、あの子は死んだほうがいいんだ。あるいは、私が死ねばいいのよ。これ以上見なくてすむもの」と言った。癌に侵され亡くなった人の推計数は4千人から9万人と大きなずれがあるが、被曝地の人々は死の恐怖に怯えながら過ごしている。ある父親は6歳の娘から「パパ、あたしね、生きていたい。まだちっちゃいんだもの」と耳元でひそひそとささやかれた。障害児の出産も多く見られるようになった。ある母親に10年生の娘が「ママ、私、もし障害児を生んでもやっぱり愛してやるわ」と言った。被曝地域はスターリンに支配され、ナチズムの侵略を受け、アフガニスタン侵攻に狩り出された。多くの戦争を経験している彼らは「戦争だけはほんとうに恐ろしい。— チェルノブイリ、これは戦争に輪をかけた戦争ですよ」と言う。

アレクシエービッチはこの本を著す動機を下記のように語っている。「チェルノブイリは第三次世界大戦なのです。しかし、わたしたちはそれが始まったことに気づきさえしませんでした。この戦争がどう展開し、人間や人間の本質になにが起き、国家が人間に対していかに恥知らずな振る舞いをするか、こんなことを知ったのはわたしたちが最初なのです。国家というものは自分の問題や政府を守ることに専念し、人間は歴史のなかに消えていくのです。革命や第二次世界大戦の中に一人ひとりの人間が消えてしまったように。だからこそ、個々人の人間の記憶を残すことがたいせつなのです。」彼女は福島原発事故に心を痛め「チェルノブイリから福島へ」のメッセージを寄せている。「進歩という名のあとに残ったのは進歩の残骸ばかり。進歩という罍気楼の墓場だ。原子炉の安全装置は最高レベルといわれながら、大地震の前には取るに足りない子供服のように役立たなかった。… 原子力時代を脱却すべきだ。私がチェルノブイリで眼にしたような姿に世界がなってしまうわないために、他の道を探すべきだ。」チェルノブイリの悲惨と悲劇を誰よりも知る彼女の「未来への物語」を重く受け止めたい。